

審査の結果の要旨 氏名 澤井一彰

本論文は、16世紀後半におけるオスマン帝国支配下の東地中海世界と帝都イスタンブルにおける食糧供給問題を、オスマン朝の未刊、公刊の原史料に基き、気候変動史を踏まえつつ、社会史的視点から解明した労作である。

本論文は、オスマン朝史料中、内容的均質性と時間的継続性において最も重要な史料群である枢機勅令簿の精緻な分析に基づく研究成果として、国際的な水準に達している。本論文の中では、近年とみに注目を集めつつある地理的環境と気候変動の視点を踏まえつつ、16世紀後半における気候の寒冷化と食糧危機の問題を、帝都イスタンブルと東地中海世界という空間のなかで検討した論文であり、オスマン朝の当局がこの問題にいかなるかたちで対応したかについて詳細に解明した点で、学説史上も新境地を開いたと言える。この試みの中で、とりわけオスマン朝の帝都イスタンブルが黒海も含む東地中海世界全域に広がる広範な食糧供給圏を背景としていたことを明らかにした点で、オスマン朝史のみならず東地中海史研究における重要な貢献といえる。さらに、16世紀後半においては、オスマン帝国領内・東地中海世界にとどまらず、地中海世界全体において気候の寒冷化と人口増加に関連し、食糧問題が大きな問題となっており、地中海世界の諸国家が食糧確保をめぐり熾烈な争奪戦を展開していたことを、オスマン側の史料に基き詳細に分析した点も、同時代の地中海世界史研究にとり新たな貢献と言える。

とは言え、まず主として依拠した史料がオスマン帝国中央政府の政策的視点を中心に編まれた枢機勅令簿であるために、視角が食糧政策的な面に傾斜しがちとなり、食糧問題が現実の社会生活といかなるかたちでかかわったかについての高密度の分析が達成できなかったところにひとつの限界が存する。また、気候変動史と社会史との連関を、食糧に焦点を絞りつつ検討しようとした試みではあるが、政策的観点から継続的に記録された枢機勅令簿を主要な史料としたため、現実の気候変動とこれと直接関連した食糧問題との相関関係と、本論文が詳細に分析した政策決定者による気候変動認識と食糧問題へのかかわりととの相対的関係が必ずしも体系的に明らかにされなかったきらいがある。さらに、黒海沿岸を含む東地中海全域における穀物流通問題と、イスタンブル都市社会における穀物問題というふたつの大きな問題の解明を同時に試みたために、論点が拡散する結果を生んだところにも改善の余地が存する。

以上のような諸問題点をはらんではいるが、未刊のオスマン語文書史料を中心に広範に史料を博搜し、東地中海世界、そしてその中心をなす帝都イスタンブルを対象として、気候変動を中心とする環境史と食糧問題ならびに人口問題を中心にする社会史を関連付けながら解明しようとした本論文は、国際的にも先駆的な労作であり、博士（文学）を授与するにふさわしいものであると認める。